

# ざしき童子のはなし

宮沢賢治

青空文庫



ぼくらの方の、ざしき童子ぼっこのはなしです。

あかるいひるま、みんなが山へはたらきに出て、こどもがふたり、庭にわであそんでおりました。大きな家にだれもおりませんでしたから、そこらはしんとしています。

ところが家の、どこかのざしきで、ざわつざわつと箒ほうきの音がしたのです。

ふたりのこどもは、おたがい肩かたにしつかりと手を組みあつて、こっそり行つてみましたが、どのざしきにもたれもいず、刀かたなの箱はこもひっそりとして、かきねの檜ひのきが、いよいよ青く見えるきり、たれもどこにもいませんでした。

ざわつざわつと箒ほうきの音がきこえます。

とおくの百舌もずの声なのか、北きた上川かみの瀬せの音か、どこかで豆まめを箕みにかけるのか、ふたりでいろいろ考えながら、だまつて聴きいてみましたが、やっぱりどれでもないようでした。

たしかにどこかで、ざわつざわつと箒ほうきの音がきこえたのです。

も一どこっそり、ざしきをのぞいてみましたが、どのざしきにもたれもいず、ただお日さまの光ばかりそこらいちめん、あかるく降ふつておりました。

こんなのがざしき童子ぼっこです。

「大だい道どうめぐり、大だい道どうめぐり」

一生いっせいけん命めい、ここう叫さけびながら、ちちようど十じゅう人にんの子こ供どもらが、両りょう手てをつないでまるくなり、ぐるぐるぐるぐる座敷ざしきのなかをまわっていました。どの子こもみんな、そのうちのお振舞ふるまいによよばれて来きたのです。

ぐるぐるぐるぐる、まわってあそんでおりました。

そしたらいつか、十一人になりました。

ひとりも知らない顔かほがなく、ひとりもおんなじ顔かほがなく、それでもやつぱり、どう数えでも十一人だけおりました。そのふえた一人がざしきぼつこなのだぞと、大人おとなが出て来て言いいました。

けれどもたれがふえたのか、とにかくみんな、自分だけは、どうしてもざしきぼつこでないと、一生いっせいけん命眼めを張はって、きちんとすわっておりました。

こんなのがざしきぼつこです。

それからまたこういうのです。

ある大きな本家では、いつも旧きゆうの八月のはじめに、如にょらい来さまのおまつりで分家の子供らをよぶのでしたが、ある年その一人の子が、はしかにかかってやすんでいました。

「如来さんの祭りまつへ行きたい。如来さんの祭りへ行きたい」と、その子は寝ねていて、毎日言いました。

「祭りまつ延のばすから早くよくなれ」本家のおばあさんが見舞みまいに行つて、その子の頭をなでて言いました。

その子は九月によくくなりました。

そこでみんなはよばれました。ところがほかの子供こどもらは、いままで祭りを延ばされたり、鉛なまりうさぎの兎を見舞いにとられたりしたので、なんともおもしろくなくなつてたまりませんでした。

「あいつのためにひどいめにあつた。もう今日は来ても、どうしたつてあそばないぞ」と約やくそく束そくしました。

「おお、来たぞ、来たぞ」みんながざしきであそんでいたとき、にわかさけに一人が叫びました。

「ようし、かくれる」みんなは次つぎの、小さなざしきへかけ込みました。

そしたらどうです。そのざしきのまん中に、今やつと来たばつかりのはずの、あのはしかをやんだ子が、まるつきりやせて青ざめて、泣きだしそうな顔をして、新しい熊のおもちやを持つて、きちんとすわっていたのです。

「ざしきぼつこだ」一人が叫んでにげだしました。みんなもわあつとにげました。ざしきぼつこは泣きました。

こんなのがざしきぼつこです。

また、北上川の朗妙寺の淵の渡し守が、ある日わたしに言いました。

「旧暦八月十七日の晩、おらは酒のんで早く寝た。おおい、おおいと向こうで呼んだ。起きて小屋から出てみたら、お月さまはちようどそらのてつぺんだ。おらは急いで舟だして、向こうの岸に行つてみたらば、紋付を着て刀をさし、袴をはいたきれいな子供だ。たつた一人で、白緒のぞうりもはいていた。渡るかと言ったら、たのむと言った。子どもは乗った。舟がまん中ごろに来たとき、おらは見ないふりしてよく子供を見た。きちんと膝に手を置いて、そらを見ながらすわっていた。

お前さん今からどこへ行く、どこから来たつてきいたらば、子供はかあいい声で答えた。

その笹田ささだのうちには、いぶんながくいたけれど、もうあきたから他ほかへ行くよ。なぜあきた  
 ねってきいたらば、子供はだまってわらっていた。どこへ行くねってまたきいたらば、更さ  
 木の齋藤さいとうへ行くよと言った。岸についたら子供はもういず、おらは小屋こやの入口にこしか  
 けていた。夢ゆめだかなんだかわからない。けれどもきつと本当だ。それから笹田がおちぶれ  
 て、更木の齋藤では病氣もすっかり直ったし、むすこも大学を終わったし、めきめき立派りっぱ  
 になつたから」

こんなのがざしき童子ぼっこです。





# 青空文庫情報

底本：「ゼロ弾きのゴージュ」角川文庫、角川書店

1957（昭和32）年11月15日初版発行

1967（昭和42）年4月5日10版発行

1993（平成5）年5月20日改版50版発行

初出：「月曜」

1926（大正15）年2月号

入力：土屋隆

校正：田中敬三

2008年3月25日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# ざしき童子のはなし

宮沢賢治

2020年 7月17日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>